

北緯40度●彫刻とホッケーのまち

広報いわてまち

発行/岩手町 〒028-4395 岩手県岩手町五日市10-44
TEL 0195-62-2111 FAX 0195-62-3104
編集/企画商工課 Home Page <http://www.town.iwate.iwate.jp>

2005年12月1日
12
NO.558

手を携えとも歩んだ夫婦の歴史も
振り返ってみればもう半世紀
これからも二人一緒に
健康で仲良く過ごしましょうね

特集◎信頼と情熱で築いた検診の軌跡

「あきらめない」

写真 = 細野喜三郎さん・サクラさん夫妻（岩瀬張）

良かった、本当に良かった。 検診に支えられた私の15年

岩瀬張の細野喜三郎さん(72)・サクラさん(70)は、仲良し夫婦。昭和二十九年に結婚以来、農業などで生計を立てながら、四人の子どもたちの成長を楽しみに、手を携えて歩んできました。その子どもたちも結婚し、孫たちも生まれ、家中が幸せに満ちあふれていた平成二年、サクラさんはその年始まったばかりの町の大腸検診を受けました。結果は「陽性」。不安な気持ちを

抱えながら精密検査を受け、手術が必要だと告げられました。「何の症状もなかったのに」。驚きのあまり、家族にも話せず、不安な日々を過ごしました。しかし、「早く良くなって、小さい孫たちの成長を見たい」。家族とともに、再び平穏で幸せな暮らしに戻りたいという思いが、手術を決意させました。手術は成功。喜三郎さんや子どもたち、孫たちの優しい愛情に包まれ回復。家族の笑顔に囲まれた幸せな暮らしが、また戻ってきました。

あれから十五年。田畑の秋じまいを終えたサクラさんは、工事作業の手伝いに出るなど忙しい日々を過ごしています。喜三郎さんとの結婚生活も、もう半世紀。昨年、金婚式を迎えた喜びを家族とともに分かち合いました。「あの時、検診を受けていなかったら...」。当時を思い出すたび良かった。本当に、良かった」という思いが二人の胸にじんわりとわいてきます。「これから二人、健康で仲良く過ごしていきますましょね」。サクラさんの言葉に、喜三郎さんもそっとほほ笑みうなずいていました。

岩手町では、検診事業に力を入れています。財政がひっ迫し県内市町村の多くが検診の有料化に踏み切る中、岩手町は無料化を堅持。健康でいることの安心と幸せを、感じられる町づくりを進めています。

検診受診率は全国トップレベルの高さを誇ります。特に大腸検診は、受診率の高さとともに「岩手町方式」という独自の推進体制の確立に、医学会からも高い評価を受けています。

今月は、町民の健康と安心を支える「検診」について、考えてみましょう。

特集 信頼と情熱で築いた検診の軌跡

「あきらめない」

大腸がん検診

近年増加傾向の大腸がんは、このまま推移するとがんによる死因のトップになるのではないかと危惧されています。そんな中、岩手町の大腸検診は、全国にも例を見ない受診率と発見率の高さを誇ります。大腸がん検診の「今」に迫ります。



ファイバースコープによる内視鏡検査で発見された大腸内のポリープ(写真提供:岩手県立沼宮内病院)

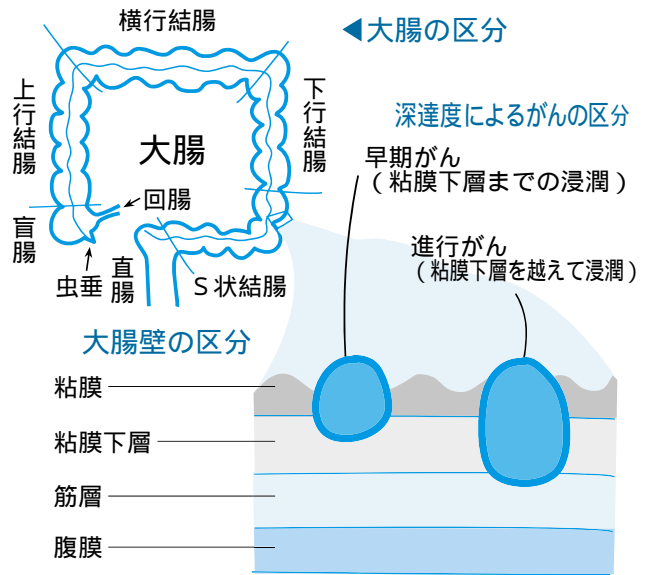
えっ!?盲腸も大腸なの 増える日本の大腸がん

大腸は、直腸、結腸S状、下行、横行、上行)と盲腸を総称し大腸といえます。そして、この大腸の部位にできた上皮性悪性腫瘍を大腸がんといいます。

大腸がんはこれまで、日本人には少ない病気といわれてきました。しかし、ここ数十年の大腸ポリープ・がんの発見者数は増加傾向。二〇一〇年ごろには、大腸がんが悪性腫瘍による死因のトップになるのではないかとされています。

大腸がんが増えてきた要因として考えられるのは、食事の西洋化です。

大腸の区分

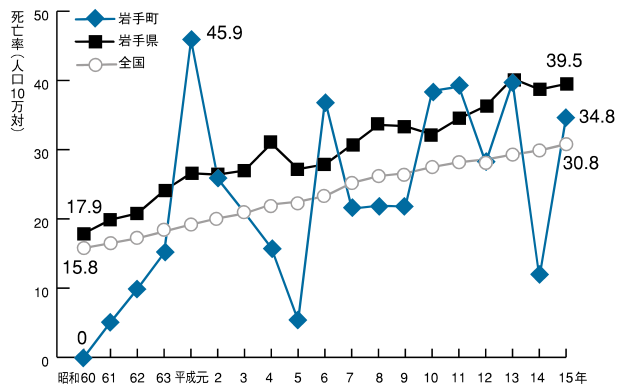


和食中心の食事から、高脂肪、高タンパク質の洋食に変化。本来欧米人に多かった大腸がんが、日本人にも多く発生するようになりました。大腸がん発生の経路は、大きく分けて二通り考えられています。一つは、ポリープができ、一部ががん化して早期がんとなり、やがて進行がんになるタイプ。もう一つは、正常粘膜からすぐに早期がん、進行がんとなる経路です。

特に、前者の発生経路が多いと考えられ、ポリープの段階で処置できれば、がんを予防できる可能性が非常に高くなります。

大腸がんの場合、がんやポリープは粘膜から発生します。がんが粘膜

大腸がんの死亡率の推移



層に留まっているものを早期がんと呼び、ファイバースコープで切除できます。しかし、粘膜下層まで浸潤していると、リンパ節への転移が疑われます。この場合、病巣だけでなく周辺のリンパ節も切除するため、手術が必要になります。また、粘膜下層より深く浸潤しているものは進行がんと呼ばれ、リンパ節への転移の可能性が高くなり、最初から手術が必要になります。粘膜下層までの浸潤であれば、生存率は90%以上。この段階で命を落とす可能性は極めて低くなります。また、筋層まで進んでいた場合でも、腹膜まで達していなければ生存率は80%以上になっています。



内視鏡検査を行う宮本勇二医師 = 右端。大腸内を注視しカメラを進めます

進化した試薬と内視鏡 負担が軽く精度も向上

大腸検診の一次検査は、便に血が混じっているかどうかを調べる便潜血反応で行います。人のヘモグロビン（血色素）にだけ特異的に反応する試薬を使うことで、主に大腸からの出血だけを感じできます。

二次（精密）検査の方法は施設により異なりますが、町の大腸がん二次検査を行う県立沼宮内病院では、

ファイバースコープを使った内視鏡検査を行います。直腸とS状結腸に病変発生の確率が高いため、特に有効と考えられています。カメラで映し出されたポリープの形態、色調などを肉眼で診断。さらに、病変の一部を取り顕微鏡で検査し、良性、悪性（早期がん、進行がん）の状態も診断します。

しかし、腹部の手術経験がある人や腸管の長い人などは、奥の盲腸までカメラを入れ診断するのが難しいため、エックス線撮影を併用し検査が行われています。エックス線撮影は、病変が体のどこの場所に発生しているか確実に分かる一方、腸管内に便が残っていた場合、それが便かポリープか、それともがんなのか判定が難しいこともあります。また、S状結腸などは腸管同士の重なりが多く、大きな進行がんさえも見落とす危険性があります。

大腸がんは予防できる 継続と早期発見が大切

「大腸がんは、早期の発見と治療で予防できるがんの一つ。ポリープ段階で切除すれば、ほとんどの大腸がんを防ぐことができると考えています」。沼宮内病院で内科長を務める宮本勇二医師（50）の言葉には、自信があふれています。



内視鏡検査で使われるファイバースコープ。検査機器の進歩で精度は向上し、患者の負担も軽くなりました

特集 信頼と情熱で築いた検診の軌跡

「あきらめなし」

三者連携で健康支える 「岩手町方式」のすゝめ

岩手町の大腸検診の受診率やポリープ・がんの発見率は、県や全国の平均を大きく上回る極めて高い数値を誇っています。その評価も高く、七月に盛岡市で開かれた日本消化器集団検診学会東北地方会での成果を発表するなど、特に医学会から大きく賞讃されています。

宮本医師は「役場と医療機関が検診の進め方を話し合い、役場と保健推進員が住民の受診を強力に勧奨。そして、医療機関は検査結果を役場に報告。この繰り返しと三者の連携ができているからこそ岩手町の検診はうまくいっているんだと思います」と分析します。この独自の検診体制こそが「岩手町方式」であり、これにより住民の健康をしっかりと見守ることができるのです。

最下位からの脱却

昭和五十年代半ば、岩手町の検診受診率は県内で最低に近い状態でした。胃、循環器、婦人科、乳がんの検診は県内最下位、胸部検診も下から三番目。県内ワースト3の汚名を返すべく目指した「受診率最下位からの脱却」。町の検診事業への取り組みが動き始めました。

受診率の向上を目標に 推進員と保健師が一体

岩手国体以後の健康体力づくり運動の功績が認められ、第十八回体力づくり運動推進全国大会で内閣総理大臣賞を受賞(昭和五十一年)した岩

手町にとって、「検診受診率県内最下位」は汚名そのものでした。受診率は、健康づくりを客観的に計ることができ、物差し」。町の保健活動を担当する保健師と保健推進員は、健康づくりの確かな目標として受診率向上を掲げました。



そもそも受診率の低さはどこに要因があるのか。まず検診の実施方法を再検討しました。検診で重要なのは、対象者の把握。そこで、保健推進員が各世帯を回り、受診予定調査を行いました。聞き取り調査した内容を保健師がデータ処理し、検診漏れがないように努めました。

受診予定調査や通知書を配布する保健推進員は、住民に直接受診を呼び掛けました。検診への関心が低かった当時、住民の反応は冷ややかでした。前保健推進員協議会長の乙茂内信子さんは「しつこい」。病気になるたら病院に行くから検診には行かない」と訪問先で怒られ、煙たがられ、悔しい思いをしたこともあり



町保健推進員協議会・前会長
おともないのぶこ
乙茂内信子さん(74) = 犬袋 =
一緒にやりましょう

「一緒にやりましょう」。保健師の言葉に何度励まされたことでしょう。保健推進員を始めたころは、検診を勧めても投げやりな断られるなど苦労も多かったです。でも、そんな時に支えになったのがこの言葉。推進員の活動が定着してからは、住民の「ご苦勞さんです」の言葉が、私たちの励みになりました。経験と信頼の積み重ねが、推進員の財産です。

ました」と活動の苦勞を語ります。また、検診を受けるのを住民が忘れないよう、前日の夜に保健師が広報車で呼び掛け。民家の明かりだけを頼りに地域をくまなく車で走りまわりました。広報車が通ると、「うるさい」と怒鳴られることもありましたが。その一方で、地域の保健推進員がわざわざ家の外に出て、「保健婦さん、ご苦勞さま」と、掛けるねざらいの一言に大きく励まされました。昭和五十八年には各種検診の申し込みを全世帯に配布し、循環器検診の日数と会場を増やしました。また、検診料金を無料にするなど、受診環境はさらに改善され、循環器検診では受診率が前年の二倍近い25・7%に急上昇しました。その後、検診モデル地区や受診率の低い地区での「草の根保健事業」を行うなど、地道な取り組みを続け、受診率の底上げを進めました。



町検診推進委員会委員長
さかい ひろき
坂井 博毅医師(69)
(医療法人博理会 坂井医院院長)

全国に誇れる活動

検診委員会設立で地域医療の考え方が一つになり、医療、保健、予防の3つがうまく連動。特に消化器の集団検診は、行政と住民、医師が一体となった全国に誇れる活動です。

夜の健康講座では、地域を順番に回り病気や検診に対する住民の不安を解消。この活動が受診率を上げる大きなきっかけになったと思います。



①保健推進員研修会でのグループワーク。活動の悩みや喜びなどを共有することで推進員のつながりを強め地域の健康づくりリーダーとしての意識を高めました(昭和63年2月、五日市生活改善センター) ②町内医師たちが各地区を巡回し開催された「夜の健康講座」。住民の健康意識の高揚と検診受診率の向上に大きな役割を果たしました(平成2年2月、御堂集落センター)



特集 信頼と情熱で築いた検診の軌跡

「あきらめなし」

行政と医療機関が団結 三者連携で強力に推進

昭和六十二年、町保健推進員協議会が設置され、検診活動が一層活発に進められました。受診率は県平均を上回る勢いで推移。しかし、検診で病気を発見したが、すでに進行が。どうすることもできない状態に。町の医師がつぶやきました。「進行がんで見つかったても、検診の意味がない」。この一言が、町の検診体制に再び大きな変化をもたらしました。行政と医療機関の連携を強化するため、町検診推進委員会が同年設立されました。委員長に坂井医院院長の坂井博毅医師、副委員長に沼宮内病院院長の高橋司医師が就任。佐々木医院院長の佐々木久夫医師や沼宮内病院の佐藤公也内科医師、役場保健課職員で構成されました。

坂井医師は、委員会では、受診率、



町健康福祉課
にしょうじ さちこ
仁昌寺幸子保健師長(55)

本当のパートナー

電算化による対象者の把握は、検診事業にとってとても画期的でした。また、夜の健康講座は検診に関心を持ってもらおうと、無我夢中で地域を駆け回った思い出深い事業です。地域の中で重責を担う保健推進員の悩みに私たちも共感。医師団とは早期発見の喜びを共有。三者は、喜びもつらさも分かち合った本当の「パートナー」だと思います。

発見数などのデータを基に、検診体制や未受診者対策を議論。評価と反省、計画の繰り返しで受診率向上につながった」と分析します。

また、町内医師団の協力を得て「夜の健康講座」を各地で開きました。「保健師が企画し、医師団が講師を務め、保健推進員たちが地域に参加を呼び掛け。大雪の日も雪をかき分け、地域住民の待つ集会所へ向かい、がんや婦人科疾患、脳出血などをテーマに講演会を行い、健康への関心を高めました」。町健康福祉課の仁昌寺幸子保健師長は、保健推進員、医師団とともに、懸命に地域を駆け回った時代に思いをはせます。

三者の地道な取り組みは、住民から次第に理解され、信頼されるようになりました。検診に取り組み始めて約十年。時代が昭和から平成に変わるころ、岩手町の検診受診率は、県内トップクラスに向上しました。

岩手町方式

行政、医療機関、地域の協働による検診推進体制は、受診率を徐々に押し上げました。そして、新たに取り組んだ国の大腸検診モデル事業。試行錯誤を繰り返しながら、多くの困難を信頼と情熱で乗り越え確立した独自の検診推進体制「岩手町方式」に迫ります。

国のモデル事業を導入 早期発見を目標に一丸

平成元年、大腸がんで亡くなる人の数が、胃がんで亡くなる人の数を上回るようになりました。国も大腸がんの増加傾向に大きな危機感を抱き、当時の厚生省は大腸検診のモデル地区として全国から十二地区を選ぶことになりました。

そのころ岩手町は、保健推進員協議会や検診推進委員会の設立など、行政、医療機関、地域の連携で検診受診率の上昇に勢いがついていた時期。受診率はすでに県内でもトップクラスにまで向上していました。これまで検診に取り組んできた成果を手に町は、国に採択を願いました。

平成二年、三千余りの自治体の中から岩手町が「大腸がん検診モデル事業」に選ばれ、ここから大腸検診への取り組みが始まりました。

岩手町が大腸検診に取り組むのはまったく初めてで、検診内容や実施方法など分からないことが多く、手探りの状態でした。そこで、検診推進委員会の医師たちから大腸検診の概要について説明を受け、実施方法などを検討し、検診の体系を作成。大腸がんの早期発見、早期治療を目標に一丸となって取り組むことを確認しました。

一次検査の容器の配布と採便方法の説明、検体回収は保健推進員が担当しました。推進員は、正しく検査が行えるよう採便方法を住民に丁寧に指導。また、検体の提出を忘れた住民には、電話をかけて知らせるなど、地域での地道な取り組みを展開しました。

二次の精密検査は、沼宮内病院が一手に担当。沼宮内病院の検査処理能力を考慮し、小単位行政区に分けたスムーズな検査態勢を整え、受診



(写真奥右から順に)北海道対がん協会検診センターの有末太郎医師と沼宮内病院の渡辺恒雄医師を講師に招き大腸がんについての講演会を開催。検診による早期発見で大腸がんを予防しようという決意を新たにしました(平成11年5月、町保健センター)

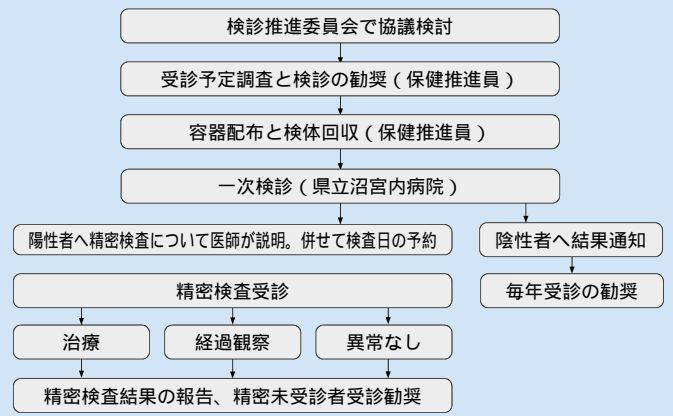


大腸検診二次検査の説明会。検査機器の進歩で患者の負担が軽くなったことや大腸がんは予防できることなどを医師が説明し、その後検査日の予約も行われます

特集 信頼と情熱で築いた検診の軌跡

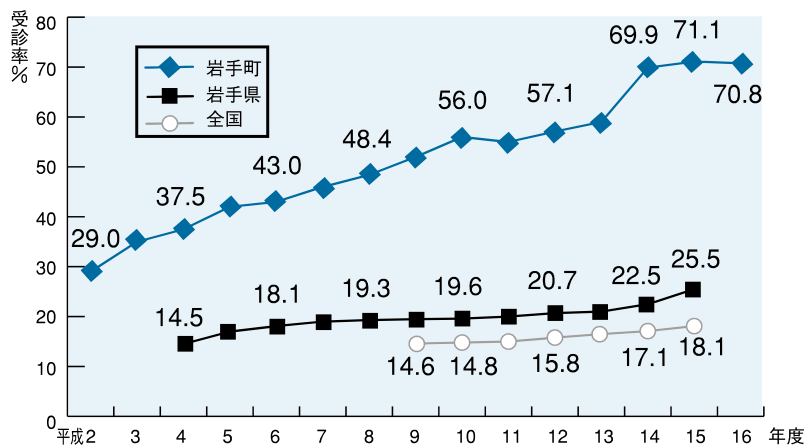
「あきらめなれい」

岩手町の大腸検診の流れ



大腸検診の受診率

・岩手県……老人保健事業年報、岩手の老人保健による
 ・全国……厚生労働省、統計調査結果による



町保健推進員協議会長

三浦ミサオさん(63) = 横田 =

悩みも喜びも共有

保健推進員になった当初は警戒され、検診の苦情を言われることもありましたが、不在宅へは何度も訪問し直接手渡し。例年受けない人に検診を勧め受診した時は、とてもうれしいですね。「ご苦労さん」の一言で苦労が報われ活動の励みになります。協議会では何でも話し合い、活動の悩みも喜びも共有する良い関係を築けるよう努力しています。

者が二次検査を受けるまでの不安解消に努めました。

行政は、検診本来の目的である早期発見・治療につなげるため、「一次検査を無駄にしない」を医療機関との合言葉に、二次検査対象者へ受診を強力に勧めました。

初年度の大腸検診は、二千百九十二人が受診し、受診率は29・0%になりました。これは現在の岩手県の平均受診率と比較しても高い数字。受診率向上に取り組んできた成果を垣間見た瞬間でした。

その一方で、検診結果は関係者を驚かせました。精密検査で異常が見つかり、しかも進行がんの状態が多かったことです。町健康福祉課の道ノ下るみ子主任保健師は「大腸がんが増えていることを実感し、また早期発見の大切さも痛切に感じました」。関係者たちは、検診への取り組みに決意を新たにしました。



町健康福祉課健康推進係

道ノ下るみ子主任保健師(39)

検診の大切さ実感

精密検査を受けずに出稼ぎに行った人に、何度も電話をかけ検査を勧めたところ、正月休みに帰省し受診。進行がんが見つかりすぐに手術したそうです。その後、幸いにも再発しなかったことを知り、あきらめずに検診を勧めて良かったと実感しました。でも、検診はあくまでも年に一度の健康チェック。普段から自分の体や健康に気を配る生活が大切ですね。

信頼と情熱で構築した協働型の検診推進体制

大腸検診に取り組み始めて今年で十五年。受診率は、当初の二・五倍近い70%前後を保つようになりました。さらに、これまで大腸がんが発見された人は百六十三人で、そのうち早期がんは百一人。毎年検診を受け、早期に発見された受診者で、大腸がんで亡くなる人は皆無。「大腸がんは予防できる」ことを、十五年の取り組みで実証しました。

岩手町は今年、日本消化器集団検診学会東北地方会(盛岡市)、全国保健師学術研究大会(岐阜県)、県保健事業研修会(盛岡市)で、これまでの取り組みの成果を発表。高い評価を受けました。また、大腸検診への取り組みはほかの検診にも波及し、昨年度の平均受診率は70・2%となり、非常に高い受診率を誇っています。

多くの困難に直面しながらも決してあきらめることなく取り組んだ大腸検診。検診推進委員会を中心に、行政、医療機関、地域の三者が一体となり、年月の積み重ねとともに培った信頼と、一人でも多くの人に健康な暮らしを送ってほしいと願う情熱で築いた独自の検診推進体制が岩手町方式。その取り組みは、「協働」そのものです。

現在、全国の自治体の財政はひっ迫し、これまでのような行政主導型の町づくりは難しくなり、「協働のまちづくり」が掲げられるようになりました。しかし、岩手町では二十五年も前から検診を通じた協働のまちづくりが行われ、共に手を携え困難を乗り越えてきました。やればできる「力は私たちの中に、「協働」の土壌はすでに周りにあります。岩手町方式」は、これからのまちづくりのキーワードなのかもしれません。

岩手町の検診

無料(町負担)で行われる検診

| 検診名 | 対象 | 自己負担 | 町負担 |
|----------|-----------------------------------|-----------|--------|
| 循環器検診 | 40歳以上 | 無料 | 7,340円 |
| 胃検診 | 40歳以上 | | 4,600円 |
| 肺検診 | 40歳以上 | | 900円 |
| 結核検診 | 18歳以上 <small>(来年度から40歳以上)</small> | | 650円 |
| 大腸検診 | 40歳以上 | | 1,680円 |
| 子宮検診 | 20歳以上の女性 | | 4,500円 |
| 乳房・甲状腺検査 | 40歳以上の女性 | | 3,100円 |
| 女性の貧血検査 | 18~39歳の女性 | | 2,970円 |

希望により有料(個人負担)で行われる検診

| 検診名 | 対象 | 自己負担 | |
|-----------------------------|------------------|--------|--------|
| 前立腺がん検診 | 40歳以上の男性 | 1,575円 | |
| 卵巣腫瘍 <small>しゅよう</small> 検査 | 20歳以上の女性 | 1,000円 | |
| 乳房エックス線撮影 (マンモグラフィ) | 地区公民館 (対がん協会) | 40歳代 | 4,095円 |
| | | 50歳以上 | 2,100円 |
| | 県立沼宮内病院 | 40歳代 | 3,850円 |
| | | 50歳以上 | 2,420円 |

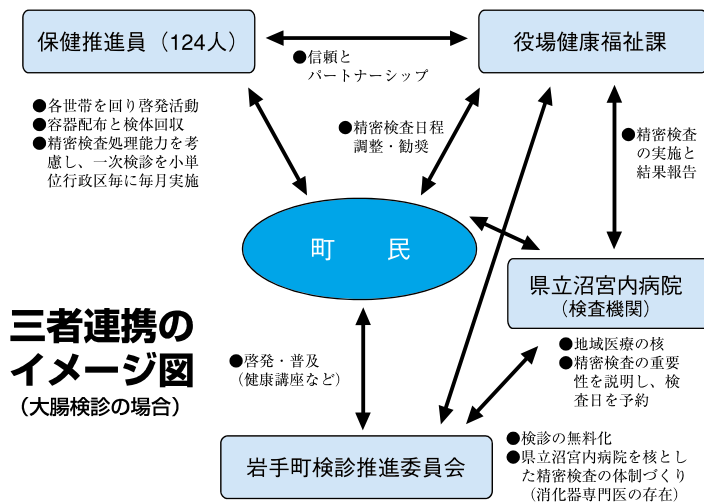
地方の行財政を取り巻く環境が厳しさを増し、県内自治体の多くが検診の有料化に踏み切る中、町では無料化を堅持しています。これは、一人でも多くの皆さんに検診を受けてもらい、健康でいることの幸せを感じながら、「生涯現役」で元気に暮らしてほしいとの願いからです。検診の無料化により町が負担する平成十七年度分の予算は六千四百万円。すべての検診を受けた場合に、町が負担する一人当たりの経費は、男性が一万五千七十円、女性が二万二千七百七十円です。また、高度な検査を希望する人たちのために、自己負担による検診も行い、検診の充実と疾病の早期発見に努めています。

検診のここが
すごい
↑
検診料金の無料化

ここがすごい 2 医療・行政・地域一体の推進体制

医療機関、行政、地域の三者が一体となり構築している検診推進体制は、岩手町独自のスタイルであり「岩手町方式」と呼ばれています。「一人でも多くの人に健康な暮らしを送ってほしい」という願いを共有し、受診率の向上と疾病の早期発見・治療を目標に掲げ、積極的に検診に取り組みます。

保健推進員(地域)と保健師(行政)は、対象者の把握と受診勧奨を徹底的に進め、医療機関は受診状況などを行政に報告。行政は未受診者の解消に努め、また、検診推進委員会で評価と指導を受けます。そして、この評価などを基に検診環境の整備や計画の検討が行われます。この繰り返し住民の信頼と健康意識を醸成し、受診率向上と疾病の早期発見に大きくつながっているのです。岩手町の受診率の高さは、この三者一体の取り組みが秘けつです。

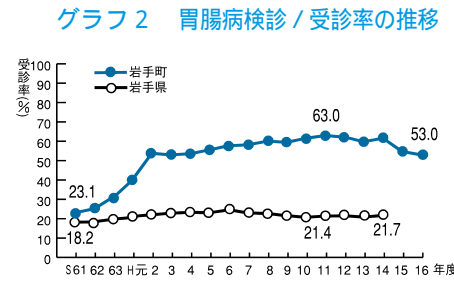
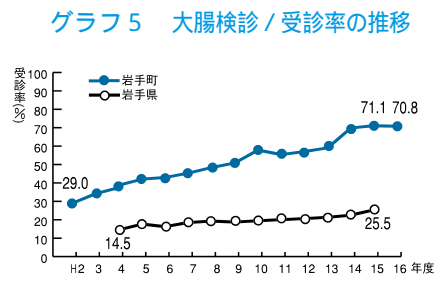
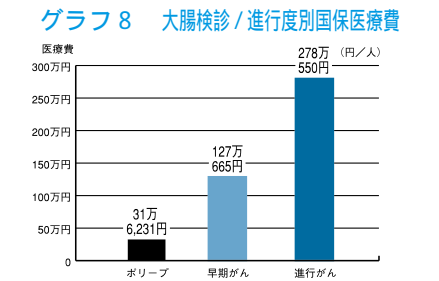
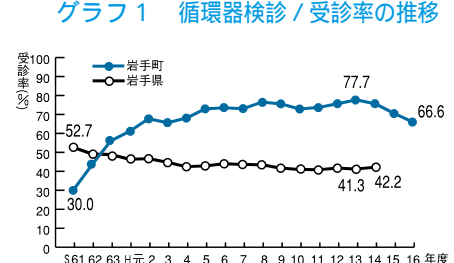
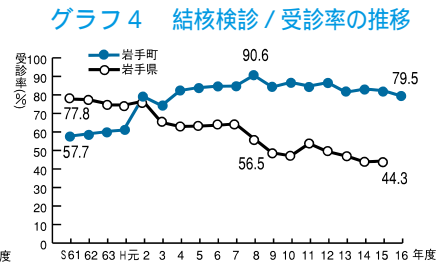
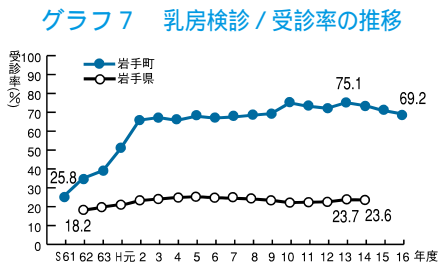
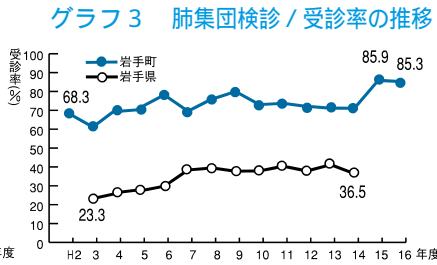
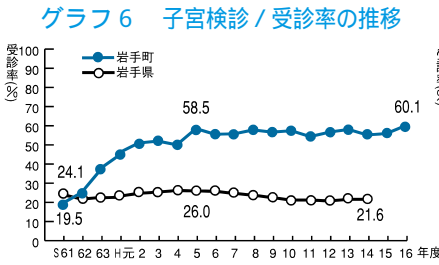


体調や仕事などの都合で受診できなかった住民の結核の追加検診。徹底的な未受診解消も町の検診のすごさです

全国に誇る!!

ここが3 受診率

町の検診は、県の平均を大きく上回る極めて高い受診率を誇っています(グラフ1~7)。受診率の高さは、住民の健康意識の高さそのもの。また、疾病の早期発見・治療は、医療費の抑制にも大きくつながります(グラフ8)。



「笑顔」がやりがい

町保健推進員
はたなか けいこ
畑中 桂子さん(40)=下屋敷=

一人でも多くの住民に検診を受けてもらうための検診の無料化は、とても効果的。担当地域の対象者のほとんどが検診を受けています。検診後、役場から送られた「異常なし」の通知を受診者に配布した時、うれしそうにほほ笑む顔を見ると、保健推進員のやりがいを感じます。また、推進員の活動を通じ、地域やいろんな人たちと交流できたことが、私の財産になりました。

「岩手町の検診の良さを離れてみて実感した」。町外に転出した住民の声に、うれしさと仕事への誇りを感じました。住民の健康への関心と意識は、以前よりとても高くなりました。でも、体の健康だけでなく、心の健康も大切。元気で生き生きと暮らすためにも、何かに感動し、面白いと思える心と体を養いましょう。そのためのきっかけづくりを、私たち保健師がお手伝いします。



離れて実感町の良さ

町健康福祉課健康推進係
さわぐち としえ
沢口 利江主任保健師(46)



継続的な観察可能に

県立沼宮内病院
おかだ ゆきお
岡田 行生院長(63)

岩手町に赴任し、検診活動に一生懸命取り組んでいることを知りました。精密検査を沼宮内病院で行っているためデータがまとめやすく、患者の経過を継続的に見ることが可能に。これは、全国に誇れる活動です。国も検診に力を入れ、早期発見治療で医療費を抑制しようという指針を出しました。今後は大腸、乳房の検診をより充実させ、早期に発見できるよう努めたいですね。

こんにちは、 保健推進員です。

宮古サチエさん(63)は上苗代
沢は、三期九年目のベテラン保
健推進員。「こんにちは、保健推
進員です」。明るく元気な声が玄関先
から家の中へと広がります。「こ
ろまでです」。訪問先の家の人の声
も明るくなります。

地域の人たちともすつかり顔
なじみ。「庭のお花、とてもすてき
ねえ」。世間話にも花を咲かせなが
ら、今度、町の検診がありますよ」
との宮古さんの言葉に、「必ず行き
ますよ」と応えてくれます。岩手
町に暮らす人たちの玄関先で繰り
広げられる、ごく普通の光景です。

この光景が普通に感じられるま
では、保健推進員、町内医師団、
保健師たちの言葉には言い尽くせ
ないほどの苦労と努力がありまし
た。玄関先で怒鳴られたこともあ
りました。吹雪の中、雪をかき分
け健康講座に向かったことも。や
つと受けてもらえた検診なのに、
すでに進行がんでやりきれない気
持ちになったことも。つらく苦し
い思い、自分の無力さを感じ「何
のためにこんなに頑張らなきゃい
けないのだろう」と道を見失いか
けたこともありました。

そんな時、わいてくるのは「あ
きらめちゃいけない」という言葉。
もう一声掛ければ検診を受けてく
れるかもしれない。もう一回訪問
した時には話を聞いてもらえるか
もしれない。もう少し、病気や検
査について理解してもらえれば、
受けてもらえるかもしれない。あ
ともう少し…、その努力で救える
命があるかもしれない。だから、
「あきらめちゃいけない」。

「一人でも多くの人が、病気を
早く見つけて治し、健康な暮らし
を送ってほしい」。そういう気持ち
が伝わってくれたらうれしいと、
宮古さんも頑張ってきました。

つらく苦しい時を乗り越え、今
に至っているのも、その強い信念
があったから。そして何より、同
じ目標と悩みを持つ大勢の仲間た
ちがいたからです。保健推進員、
町内医師団、保健師たちは、互い
に支え合い、励まし合い「検診受
診率の向上」を目指して頑張っ
てきました。

四半世紀にも及ぶ歴史を積み重
ね、住民と三者が少しずつ培って
きた信頼。強い信念の下、それぞ
れが熱い情熱を傾けてきた町の検

診事業は、全国に誇る受診率の高
さと岩手町独自の検診体制を築き
ました。

特集の取材先でよく耳にしたあ
きらめない」という言葉。それは
努力を続けるというだけでなく、
「命」をあきらめないという意味
が込められていました。家族も地
域の人もみな大切な命。町に暮ら
す一人ひとり大切な「あなた」の
命を私たちは決してあきらめない。
生涯現役で暮らせる健康福祉の
町・岩手町に暮らす「あなた」が、
この先も健康でいることの幸せを
感じてもらえるように。

特集 信頼と情熱で築いた検診
の軌跡「あきらめない」――終わり

特集 信頼と情熱で築いた検診の軌跡

「あきらめない」

「一人でも多くの人に、健康な暮らしを送ってほしい。そういう気持ちで伝わったらうれしい。」



写真 = 保健推進員の宮古サチエさん(上苗代沢)